

# 言語思想史学の方法論について

浜 口 稔

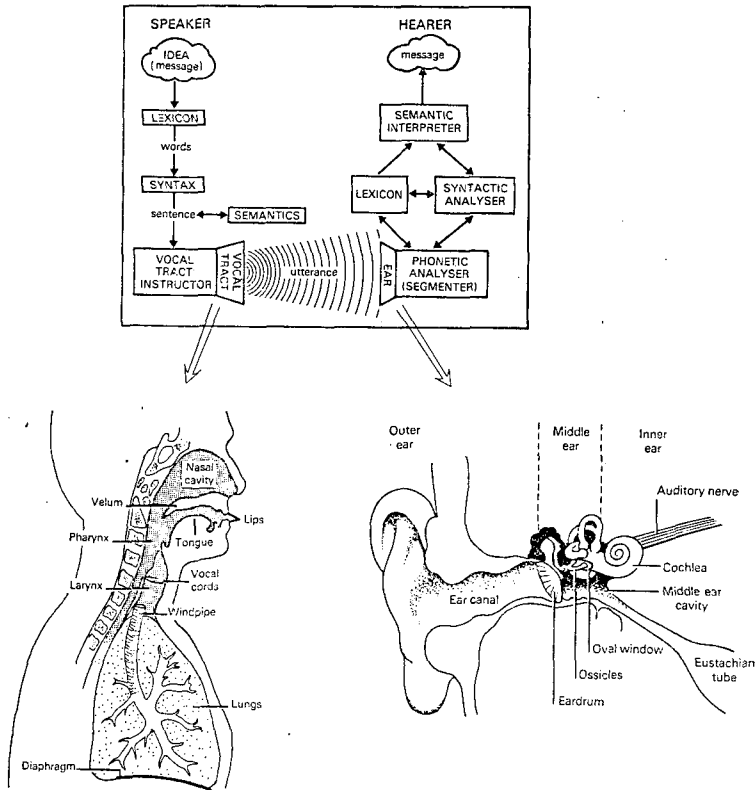
## 1. 言語とは何か

言語の本質は、通常認識されているように、単なるコミュニケーションの手段というばかりではない。それはたとえば、ノーム・チョムスキーが、そのプラトン主義的な、超時間的「文」文法理論で（言い替えるなら、発話の際に、発声器官や聴覚器官ならびに神経解剖学的な指令などと連動しながら、リアルタイムで動員される、そのつどの文法的知識というイメージとは異なった意味において）、現実の発話行為からは超越したアイデアの聴き手・話し手らの所有する完全な文法的知識という想定のもとに力説しているように、かなり重要な「思考の原理」そのものでもある<sup>1)</sup>。そのことを、プラトンやポール・ロワイヤルの文法家らが時制を動詞に固有のものとしなしていた事実に関連づけて考えるならば、チョムスキーに至る普遍知を探索する学問的系譜が、そのような言語観のもとで、またひとつ浮き彫りになっていくのが確認できるだろう。要するに、「言語とは何か」という問いは、認識とは何か、思考とは何か、話し手の発する言葉はいかにして聴き手の理解されるところとなるか、そのような哲学的な問いを同時に発することにもなっているのである。

生物存在としての人間の本性において、言語が、種々の生活場面における最重要の過程として、具体的な発話行為となって展開したり、さらにはシンボルや観念のようなものの操作をとおして思考として流れ、伝達内容として織り上がっていくと仮定するならば、そのようにして、言葉ないしある種の象徴活動

が精神内に進行するものと仮定するのであれば、その認識論的な含蓄からして、言語研究は当然ながら、神学や哲学に帰着するものとなる<sup>2)</sup>。

要するに、話し手と聴き手のあいだの物理的空間、少なくとも言語的には混沌たる空間を、メッセージという精神の産物が、音声という物理的な容器に移し変えられて、なおかつ伝達内容を損なわずに首尾よく伝わっていく事態とは、いかなる事態であるのか、下の図を参考に考えてみるとよい<sup>3)</sup>。



もし個人と個人のあいだの非言語的空隙に、心的伝達内容を精密に乗せる音響的容器が外世界に存在することを保証できないのであれば、コミュニケーションは事実上成立しないことになり、この悪条件を埋め合わせる超越的な介在者（＝生得の普遍的言語能力）が要請されなくてはならなくなるだろう。そ

れというのも、不完全な人間の発声器官から生み出された（メッセージを乗せた）音声連鎖（utterance）は、外世界のおびただしい騒音の中をつきつて聴き手の鼓膜に到達し、中耳の耳小骨（auditory ossicle）の力学的機構を経由して、さらに内耳の蝸牛神経（cochlea）の入口の前庭窓（oval window）を叩き、それが内部のリンパ液にゆらぎを与え、基底膜の毛状細胞を刺激し、聴覚神経（auditory nerve）を経由して脳の言語中枢に至り、最終的には当初のメッセージが聴き手の心に復元されるのだが、伝達媒質がそのようにも次々に切り替わっていく行程において（実際はこれよりはるかに複雑である）、当初のメッセージが、理解の障害とならない程度に損なわれることなく首尾よく伝わっていくものだろうか、ヒトの諸言語器官の驚異的な性能を考慮に入れてもなお、それは実に大きな疑問だからである（この言語理解の複雑精緻な仕組みについては、稿を改めて詳細に論じてみたい）。それゆえこそ、そのような状況下においてなおコミュニケーションが難なく成立しているという、このありふれた日常の事実が、言語思想家の目には驚異的なものに映るのである。

あるいはまた、頭蓋の中の思考が言語を介して進行し、その進行の過程が自省のループをなして無限に回帰していくのは、いかなるからくりによるものなのか、そのような自己言及的な性格は、当然のごとく人間の文創造行為を原理的に特徴づけることにつながるという意味において、やはり純然たる哲学の領分となるのである。プラトンやアリストテレスを魅了し、スコラ神学者やジャン・パティスタ・ヴィーコ、フランシス・ベーコンらを虜にし、さらにはゴットフリード・ヴィルヘルム・ライプニッツ、ジョン・ウィルキンズ、アイザック・ニュートンらを普遍言語（universal language）の探索へとめり込ませ、ヴィルヘルム・フルボルトやジャン・ジャック・ルソーをロマン主義的思弁へと導いていったのは、言語のそのような性格の故であった。

さらに言語は、カオスとコスモスの双方を合わせもつヤヌスの相貌を帯びている。その曖昧性や豊饒性や乱脈さを嫌うものにとっては、その背後にあって、その伝達可能性の精度を保証する原理を析出する抽象への要求へとつながり、これを大いに肯定するものからは、文形成の増殖的かつ創発的な性格が強

調されたりする。言語が簡潔性・整合性を本有とする規則体系であるという観点、そしてなによりも、その表現作用の闊達さや複雑さを強調する文学研究家を中心の見方があり、ともあれ人間がそのことを巡って積み重ねてきた歴史を単純に概観しても、言語はまさにいくつもの観念のチャンネルを開き許容してくれる驚くほど柔軟かつ変幻自在なメディアであり、そのような性格からしても、人間の存在そのものの写し絵である、と言っても差し支えないだろう。

## 2. 言語思想史学は可能か

西欧の知的歴史において、言語はおそらくは、人間の存在を条件づける諸能力の中でも、もっとも人間に特徴的なものとして、ほとんどあらゆる時代の思想家の注目するところであった。思弁的であろうが、実際的な目的に奉仕しようが、言語がなんらかの形で人間の知的探求の主題でなかったことはない、と言っても過言ではないだろう。それゆえにこそ、言語研究の歴史をとおして、各々の時代の前提となり、諸学を暗黙のうちに牽引する枢要な観念を拾い上げていく作業はそのまま、西欧の知的な歴史を浮き彫りにしていくことにつながるのである。

但し、枢要な観念とは言っても、今日的な視点から、それをどのように拾い上げたらよいのか、実際の話、われわれにはそれがどのように映じているか、本当に当時の枢要な観念であったのか、だとすればそれを保証してくれる基準はどのようなものとなるのか、という具合に、方法論のレヴェルで、また学としての成立基盤において、非常に大きな問題を提起している。ある一定の時代、一定の地域に限定された思想パターンが、あるいはときに由来をどこに求めたらよいのか分からない概念が、何かを契機に、段々にその時代全体の思考傾向を形成し、支配的な観念となって学芸全般の性格を決定してしまうのであるが、実際問題として、その観念を言い当てることは可能なのだろうか、それが問われねばならないのである。この点に関しては後で触れようと思うが、要するに、今日的な視点から過去を展望しようという構えからして、すでに論述のための資料をわれわれの時代の偏りでもって選別する結果となっているから

である。ここに言語科学における観念史研究の難しさが浮かび上がってくる。

さらに重要なのは、こうした伝統的な哲学の諸問題が、今日われわれの学問的視野において展開されている様々な言語研究の試みの中で、どのような形をとって現代のわれわれの観念となり得ているか、ということである。これは偏りなく時代の枢要観念を言い当てることよりも、いっそうの困難をとまらう。戦後世界の言語思想を彩っている諸言語理論（たとえば、生成文法、体系文法、モンタギュー文法、関係文法、機能文法、記号論、テキスト文法、談話分析などなど）は、ひとつ確実に言えることは、そのいずれもが数理科学やコンピュータ時代にふさわしい<sup>4)</sup>、高度に形式的な体裁を取っているという事実であるが、あとはそれぞれの理論によって、大ざっぱな言い方になるが、一見したところ、主知主義的であったり、過程主義的であったり、生得主義的であったり、経験主義的であったり、个体発生的な視点に立つかと思えば、進化史的・生態学的な体裁をとったり、抽象性の度合において様々であったり、単純に概観しても、西欧思想史における様々なパターンが混在して摺みどころがない状態なのである。それも当然だろう。実際はあらゆる時代において、そうであったに違いないのである。唯名論の時代であるとか、實在論の時代とか、フランスは合理論、イギリスは経験論とか、そう単純に思想傾向を判断できる個人、民族、時代が存在するはずもないではないか。このことで、言語思想史研究は二重に厄介なものとなる。

おまけに現場の科学者というのは、概して自らが寄宿する学問分野の哲学的な屋台骨には、なかなか関心を払わないものである。チョムスキーの『デカルト派言語学』(*Cartesian Linguistics*) が、唯一目にとまるくらいのものである<sup>5)</sup>。実際の話、言語学の観念史は、言語そのものの研究に携わる現場の言語学者からの冷やかな視線に晒されて、十分な研究はなされずじまいであった。それが本格的な研究対象となり、このようにも隆盛を見るようになったのは、随分最近になってからのことである（これについては後述する）。

### 3. 言語思想史のサイクル

スティーヴン・ランドによると<sup>6)</sup>、17・18世紀に大流行した粒子論哲学 (corpuscularian philosophy) に立脚したジョン・ロック哲学における記号粒子的単位から、無時間的な文、つまりは「命題」を原子的単位と考える現代論理学に至るまでの連続的な展開が思いのほか明らかで、いわゆる経験主義的記号論が結局はイデア主義的「文」文法理論を用意した結果となっているわけで、観念史のサイクルの皮肉な展開を示す事実としてまことに興味深い。先にも述べたように、人間の思考は極端に対立する思考パターンが、勢力を交互に譲り合いながら歴史的に浮き沈みする、という性質のものではない。お互いがお互いを孕みながら、何かの拍子にすり替わってしまう奇妙な反転現象が、その実情であった場合が多いように思われる。中世期に隆盛を極めた様態論者 (modistae) の实在論的言語理論も (後述する)、いつの間にやら唯名論的な議論に変わっていたようである<sup>7)</sup>。また英国の17世紀においては、ラテン語の教育を巡って、普遍主義対経験主義の論争があったわけで<sup>8)</sup>、その論争の図式に見る限り、チョムスキーがスキナーに挑んだことや、チョムスキーとジャン・ピアジェの有名な論争など、歴史的にはその蒸し返しととれないこともない<sup>9)</sup>。チョムスキーの生成文法は、それと似たような展開の中で、人間の諸生活行動を「刺激」と「反応」というビリヤード盤上の玉の力学的連鎖のイメージに還元しようとした行動主義科学、および音素や形態素という粒子的原子的単位を主軸に伝統的な文法カテゴリーを解体したアメリカ構造主義言語学において、空席のままとなっていた主体を回復させ<sup>10)</sup>、いわば命題主義を主軸に置いて、そうすることで「分布主義」(distributionalism) を回収し、記号から「文」生成への途を開く作業となっているのである。もっとも、この生成文法内においても、後に明かであったように、理論運用の成果や構えを巡って、唯名論的・道具主義的立場 (生成意味論) と实在論的な立場 (解釈意味論) との間で、実に苛烈な論争が繰り広げられていた事実は記憶に新しい<sup>11)</sup>。

なにはともあれ、現実の発話行為を原理的に特徴づけるものとしての統辞能

力の全容を明示しようという構想のゆえに、一時期生成文法は、「チョムスキー革命」(Chomskian Revolution) ともはやされたのだった。ついであるが深層という概念は、少なくとも生成文法発展史の初期段階においては、20世紀の知的な風土に大きな影響を及ぼしたマルクスやフロイトなどの思想系列に連なるような印象も大きかったろうが、分類主義的な表層の言語分析に終始していたアメリカ構造言語学に比べれば(チョムスキーはこの二つの学問分野を十把ひとからげに扱っているが、実際は両者のあいだにはそう緊密な連絡があったわけではないようだ)、少なくとも一般的にはひとつの大きな視点の変化と受け取られたのも当然かもしれない。いわゆる「深い」ところにある構造が、生得の所与としての統語的演算装置(=言語能力)を介して表層の具体的な発語へと表出されるという考え方は、隠喩的なモデルとしては申し分のないものであるが、それが数理的・明示的に示されているという限りにおいて、チョムスキーが激しく批判の矛先を向けたアメリカ構造言語学の記号分類学的方法論から、今世紀の形式科学的傾向によりもたらされた抽象度の高い規則群を、縦に整序し直しただけではないのか、という印象を受ける。たとえば、それまで表層の言語現象を分布主義的に整序するための手順であった規則群が、自律的文生成装置としての人間という具合に性格づけがなされ、さらにその文生成装置を数理的・明示的な表現で公理化した時点で、「深さ」という概念は心的過程の始発点から表象までの距離として物象化されてしまうのである。表層に至るまでの規則の数の多さが、それを特徴づけると真面目に論議されたこともあったくらいである。勿論このような素朴な考え方はすぐにも否定されたが、いずれにせよ、この縦にされたというところが(勿論これも比喩的な言い方に他ならないが)、少なくとも研究者の構えに、大きな心理的な相違をもたらしたことは大いにありそうなことである。距離や量というのは、質的な差異として錯視されやすい。深層と表象は、一種の橋渡し規則によって切り替えられる異なった水準としてイメージされた。こうして観察される言語事実とは異なる抽象されたデータ(あるいは原則)という二分法的規定につながっていった、と考えられるだろう。ソシュールはこれをラングとパロールの対立として規定

したが、チョムスキーの場合は言語能力と言語運用に分類し、さらに「規則に支配された創造性」(rule-governed creativity) という名辞矛盾的特徴づけを人間の言語能力に付与したため、言語能力を公理系へと仕立て上げてしまい、ここが循環論であるが、言語事実を観察事実から遊離した形で、逆に公理的予測性の範囲内に接収するような形で選別する結果となっているのである。これは実は、チョムスキーがアメリカ構造主義言語学の中に認めて批判を加えた一種の二分法の解消へと逆行する皮肉な方向だったといえる。要するに、機械論的説明という伝統のもとに、言語能力という心的原理を物象化したために、チョムスキーが規定した二分法は事実上意味をなさなくなっているのである。もしそうであるなら、これは純正な意味でのパラダイムの転換であるとは言えないだろう（むしろアメリカ構造言語学の機械主義との密な連関を問題にして、ひとつの観念史的系譜のうちに新たな特徴づけを行えば、アメリカ言語学史の学派内社会的な相に別の水脈を探り出すことにつながるかもしれない）。「深い」という表現と「明示的」という概念は両立しない。非科学的な言い方になるが、要するに「深さ」とは曖昧で模糊たるものなのである。

しかしながら、この文学的な表現が間違いであったのは、チョムスキー自身、深層という表現を嫌って、それが「深さ」という隠喩的な意味合いを一切帯びない理論概念上の用語にすぎないことを強調していることから分かる。さらにはそのことは、最近のチョムスキー理論が、このような深さとは無縁な、様々に部門を成して群がる規則群の関係の体系という様相を呈して、明快で極めて抽象性の高い理論構造を誇っていることから確認されるだろう<sup>12)</sup>。しかしながら、これとチョムスキーがおりにふれて示唆する哲学的な議論とどう結びつくのか、その焦点はいっそう不明瞭になっていることは確かである。繰り返すが、上に述べたように、言語使用の改新性と創造性、そしてそれを可能にする生成原理を、公理主義的な体裁で展開したところに、「創造性」や「生得性」などの観念と実際の理論構成との開きを確認できるのである。これはチョムスキーが明らかにした観念史的な系譜づけの作業とは、實際上相容れない方向と言えるかもしれないのである。



われわれの時代は、病的なまでに言語に対して反省的な時代になっている、とはよく言われている指摘である。20世紀は広い意味での言語の時代だと言ってよいだろう。しかしこれは特に現代特有の病理というわけではない。中世に研究がさかんとし、ときに自己目的化するまでに精緻を極めた様態論者らの言語研究が、外的対象との指示関係という観点に立って、一種の認識の仕組みを説明する實在論的科学理論として中世に君臨していた事実は有名である。しかしそれほどまでの隆盛を見た様態論者らも、その認識の様態そのものは、語とは無縁な意味の差異を保証する比喩的な方便にすぎない、と考えるウィリアム・オヴ・オッカムを旗頭の唯名論の台頭とともに衰退を余儀なくされるのである<sup>13)</sup>。そして時代の波と共に霧散無消して、もっと実際の目的に奉仕させようとする言語観に変わっていく。つまり、ルネサンスを迎えると、すべての学芸が、実際の・道具的な傾向を帯びようになり、おまけにラテン語の衰退とともに一斉蜂起したヨーロッパ諸語の台頭もあつたりで、言語研究が自己目的化し自壊へとつながるというのは学そのものに内在する宿命であるということとは別にしても、結局は崩壊の原因は外部から追い打ちも契機となったのだ。とはいうものの、A・N・ホワイトヘッドにならうなら、こうした中世言語研究の厳密思考の習慣は、近世の実証主義的態度と結びついて、いわゆる「天才の世紀」(the century of genius)を生み出すのである<sup>14)</sup>。

この17世紀には、ルネ・デカルトがいる。G・W・ライプニッツがいる。ジョン・ロックがいる。そしてラテン語という模範的な普遍言語の消失、ヨーロッパ諸語の一斉蜂起、全ヨーロッパ的な規模の政情不安、こうした諸々の出来事が引金となって、ポール・ロワイヤル文法をはじめとする神学的・普遍的「文」分析、さらには前代未聞の人工的普遍言語運動として結実した、と考えることができるだろう。天才の世紀の事実上の先駆者であるフランシス・ベーコンが構想した哲学文法 (philosophical grammar) も、世界を混乱に導く不分明なコミュニケーションを回避するためのものであった<sup>15)</sup>。ハンス・アースレフやM・M・スローターによると<sup>16)</sup>、デカルトがこの普遍言語運動の発案者の一人であつたり、ライプニッツがロックに熱心に書簡を送っていたり、ヨハン・アモ

ス・コメニウス（＝コメンスキー）がイギリスに渡っていたり、なにしろ国境を超えた知識人らの往還が軽快な中で、実効のある人工的普遍言語の開発が望まれ、かなり真剣にアイデアや意見の交換が行われていたようなのである。イギリスでは、王立協会創設をひかえて、ロバート・ボイル、ロバート・フック、アイザック・ニュートン、ジョン・ウィルキンズらをはじめとして、そうそうたるメンバーが名を連ね、精密な人工的普遍言語の構想を実現しようと、相当熱心に動き回っていたようである<sup>17)</sup>。このような全ヨーロッパ的な、ひんぱんかつ自由な知の越境が行われていた事実を考慮せずして、この時代の言語研究にまつわる観念史を論ずることは、まず不可能であるといってよいだろう。

生きた能力として、言語は、具体的に発話として顕現するにあたっては、われわれの全生物的機能に寄宿し、その生理を絡めとり、ある種のまとまりをアピールして、人間の知性にその存在を印象づけてきたのだろう。言語はわれわれの体験世界の基盤にあり、われわれはその中に生きている。それゆえに、言語の仕組みを分明にし、その操作的な素地を整えることは同時に、世界がわれわれ人間の存在様式とのかかわりの中で編成できるものである、という意識につながったわけである。普遍言語運動が、実効を合わせもつ理想の体系として構想されたのは、古代ギリシアから中世の思弁文法の伝統も含めて<sup>18)</sup>、言語がとくに、哲学者のみならず実際の科学者らにとっても最大の関心事となったからに他ならない。この運動は資料収集の作業が、思弁や理論的総合に吸収されたことを示す端的な例であるが、スローターが指摘しているように、中世以来積み上げられていた博物学的執念が、近世の厳密実証科学と幸せな婚礼を結んだ目ざましい成果でもあった。

サイクルは再び閉じて、思弁的総合から厳密実証の時代が到来する。すなわち、主として19世紀を中心にして展開した比較言語学の時代が到来する、とそうのように一般には理解されている。まさに19世紀は、膨大な量の言語資料を後ろ盾にして、比較研究が大々的に展開された時代であるが、そのことでもって「言語科学」の真のはじまりを、ウィリアム・ジョーンズ卿の1786年と決定する基準は、この頃はまずは疑ってかかるべきもののようである。

19世紀以前の言語研究を特徴づけるに際して、博物学的な語彙塊集に終始して、19世紀に吹き出た法則についての力強い発言につながるような系統的な資料収集がなされなかったことは、よく指摘されるところである。ところが、ヴァン・デ・ヴェルデによると<sup>19)</sup>、すでに輝かしき比較言語学の時代以前に、古高地ドイツ語、古フリースランド語、古英語、古ノルド語、古サクソン語、ゴート語の親縁性を、満足な資料もないままに見いだしていたフランキスクス・ユニウスがいるのである。フランキスクス・ユニウス（1589—1677年）は、ゴート語の p とゲルマン語の f 交替であるとか、断片的ながら、子音推移の存在も指摘しているようである<sup>20)</sup>。さらに比較言語学の時代の盛況につながったラスムス・ラスクやヤーコプ・グリムの発見のひとつは、すでに発見されていたらしい。たとえば、18世紀の初めに、ランベルト・テン・カテは、ゲルマン諸語の、いわゆる母音交替（アプラウト）を見いだしていたらしいし、おまけにゴート語についての体系的な文法をものにしていただようなのである（オランダ語で書かれたため、耳目を集めなかっただけである）<sup>21)</sup>。これらの研究は、後世への直接の影響という観点に立つと、要するに、素朴な知識累積的史観に立って、ひとつの歴史のエピソードとして、ほとんど歯牙にもかけないで済ますことも可能である。しかし歴史のどの方向が正しくて、どれが正しくないか、どのような基準でその判断に臨んだらよいのか、有体に言ってそのようなものは存在しない。言語科学の「科学」なる用語の意味にしても、あまり判明なものではないのである。

#### 4. 観念史学としての言論学史

言語学の歴史という分野は、一時期しばしば軽侮の対象であった。ソシュール自身にはそのような意図はなかったであろうが、共時態の言語学の強調は、単純に言語の歴史的研究の退潮ばかりでなく、学の歴史としての言語学にも、当然ながらしるべき考慮を払わないという、無反省な習慣をつくる免罪符を与える結果となってしまったようである。言語学は規則や法則を探索するばかりでなく、共時的な相においてのみ体系化されうる厳密実証科学となってしま

った。アメリカ構造言語学全盛期の代表的人物、チャールズ・F・ホケットなどは、1950代に、有名な入門書『現代言語学講義』(*A Course of Modern Linguistics*)の中で<sup>22)</sup>、この種の書物には、「言語学史」にさくべきスペースなどないと、ほとんど問題にするようすもなかった。1786年という、ウィリアム・ジョーンズ卿の、本人はそうは意識していなかった着想、つまりはサンスクリットとヨーロッパ諸語との類縁性の指摘の時をもって、科学としての言語学のはじまりと見る考え方が、大勢を占めていたからである<sup>23)</sup>。それ以前の言語研究は、単なる思弁か哲学に過ぎないと、まるで重きを置かれていなかった。しかしながら、すでに言及したように、「科学的」という言い方は、実に曖昧な概念なのである。たとえば、先に述べた19世紀前のもろもろの先駆的な発見は膨大な資料を背景に持っていなかったからという理由で、さらには次の時代への直接的な実りをもたらさなかったからという理由で、その時代の言語研究を科学的ではなかったとは、当然言えないだろう。

言語思想史の中心的な課題が、言語や言語によるコミュニケーションと呼ばれるものの様々な側面に、つまりは言語使用の様々な機能、特定言語の文法の構築、言語の系統発生的・個体発生的なアプローチ、言語教育論争、言語の政治的支配、祈りや神学などに、関わるものであるとすれば（これこそが観念史学がもつ学問的スケールであるが）、言語学史の方法論に、時代ごとに概念的内容の揺れ動く「科学的」という条件は、あまり深刻かつ決定的なものに受けとめないほうが、実り多い結果をもたらすのではないだろうか。しかしこの問いかけは同時に、言語科学という知識分野において、科学的であるとか、前科学的であるとかの区別を立てることが、正当なことであるかという、学問の性格に関わる疑問を再検討することにもつながるのである。

言語学史という学問分野の達成目標は何か、またこの目標のためには何をなすべきか。西欧における学史に、その名をとめおかれている人物や研究の正しい評価と系譜づけ、とこともなげに定義することもできるが、これまで論じてきたように、それを現在自らが携わっている知識風土の観点から行くと、その知識風土を押し上げてきた前史（これこそが問われねばならないが）を知らず

に取り込んでいるわけで、真の標的はその時点で消失してしまっている。こうして言語科学の歴史を記すという作業が、どのような意味をもつかが問われることになるのである。たとえば、クーンの科学パラダイムの概念は適用できるだろうか。

コンラート・ケルナーによると、60年代・70年代には、科学史研究は、言語学史研究にとっても同様であるが、非常な楽観と期待を抱かせる時代であったらしい<sup>24)</sup>。いうまでもなく、1962年や出版されたトマス・クーンの『科学革命の構造』(*The Structure of Scientific Revolutions*)における「パラダイム」(paradigm)が概念が<sup>25)</sup>、クーンが専門にする物理学を越えて、言語学史の研究にも絶好のモデルを提供してくれるものと期待されたからである。特定の学の奥に潜む観念としてのパラダイムの提唱は、普遍的な適用力を持つものと考えられた。たとえば、チョムスキーの理論が、パラダイムの革命と呼ばれた理由は、まずはその理論の構築と評価に関しては、少なくとも自然科学の理論と同じ制約に則った形式のもとに展開されている、と判断されたためであった。

パラダイムという概念のもつ支配的な知的風土という視点で、現実の時代の多様性を総括できるかという至極常識的な問いは別にして、この王位交替劇的な概念は、言語学史のみならず当の科学の歴史にとっても正しい記述や評価を可能にするか、それが問われなくてはならないのである。不安の時代の新たな救世主、このように言っては身も蓋もないが、どうもこの概念は、過度に今日的な視点からの後知恵的な解釈に陥りやすい概念として、かなりの弊害をもたらしたようにも思う。いわゆるチョムスキー革命の実情は、パラダイムの革命ではなくて(実際の話、チョムスキーが生成文法を提起したとき、アメリカ構造主義言語学は、世界的な名声をはせて全盛の極みにあったようだ)、賛同者も反対者もチョムスキーの名のもとに、彼らの議論を収斂させていた歴史的事実に向けられるべきものである<sup>26)</sup>。もしこういうことが実情なのであれば、単一の概念を方法論の核に据えることは、言語学史の多彩な側面を見失わせ、その研究の方針をしばしば見当違いの方向へ導いてしまいかねない危険な罅陥と言わねばならないだろう。

いずれにせよ、言語学史研究の実情は、最近は大きく様変わりした。R・H・ロービンズの『言語学小史』(*A Short History of Linguistics*)、さらにはG・ムーナンの『言語学史』(*Histoire de la linguistique*)、そしてトマス・シービオク編集の『言語学者の肖像』(*Portraits of Linguists*)、同じ編者の膨大な『言語学の歴史学方法論』(*Historiography of Linguistics*)、デル・ハイムズ編『言語史研究——伝統とパラダイム』(*Studies in the History of Linguistics: Tradition and Paradigms*)など、いくつもの学史を主眼に置いた研究がなされ編纂されるようになり<sup>27)</sup>、2000余年にわたる言語学の認識論的・思想史的研究が、さらにはその文献学的発掘が大規模に展開されるようになったのである。

さらには現代言語理論において、決定的な足跡を残したチョムスキーが、1966年に、前述の『デカルト派言語学』を公けにして、自らの文法理論の学問的な淵源を、ジョーンズ卿の1786年をさらに遡って、17・18世紀へと跡づけることで、その頃に理論的な思弁としての学史が存在したことを大きく印象づけ、言語哲学の観点からばかりでなく、言語学史の方法論にも大きな問題提起をしていた。そして1977年の国際言語学会議で、言語「学史」が初めて本会議で討議されるに至ったのである。あとは定石通り学会が大きな進展を見せ、コンラート・ケルナーをはじめとする世界中の学者によって、大々的に研究活動が営まれている。いまや言語学史という分野は、世界的な規模の活動を誇るようになっており、第一線から退いた円熟の言語学者の回想ではまったくなくなっている。若い研究者が、自らと能力と将来を賭けて、博士論文のテーマに選ぶものも多くなっていると聞く。ここでこの学問分野で非常に大きな足跡を残したイギリスの言語学者、R・H・ロービンズに、言語学の観念史的研究のあり方を要約してもらおう<sup>28)</sup>。

History, and especially the history of ideas or intellectual history, is not anecdotal, annalistic recording, the handing down from author to author of *idées reçues*, nor just individual biographies of leading

persons, valuable as these last are. There must be some general frame of reference and some consistent view of the past and the present of the subject, within which to trace the personal and the doctrinal connections and the passing on of work accomplished and work proposed from one generation to the next, that constitutes the intellectual tradition which each historian of ideas is trying to comprehend and to interpret.

ケルナーによると<sup>29)</sup>、観念史運動の事実上の創始者、故アーサー・ラヴジョイが、1938年に観念史学宣言の論稿を公けにし、哲学、科学、政治学、経済学、社会学、美術など、10幾つもの観念史研究の領域をリストアップしたとき、実は言語学はその主要な項目に入っていなかったようである。言語学も時代の知的雰囲気は忠実に反映する観念の所産であろうのに、奇妙なことにラヴジョイは、言語学に特殊な学問的性格をみてとったのか、観念史学の研究対象から外したのだった。言語学の研究対象は確かに、正体のよく分からない言語ということもあって、単一の学問的イメージを思い描くのは、容易ではないのかもしれない。しかし言語学は、純然たる学として、ようするに人文科学として、あるときは社会科学として、さらには歴史学の対象として、そしてとりわけ近代においては、方法論にきわめて意識的な厳密科学として、また学派内知的変遷史という心理社会学的考察の対象として、当然ながら観念史学の重要な研究対象として、大いに論じられてしかるべきなのである。言語という豊かな対象を軸にして、われわれの生物学的、社会的、歴史的存在としての全容をその精緻な部分にまで辿りうる有機的な媒体として、それが様々な学者や思想家を翻弄してきた有様を、われわれはこの新興の学問分野を介して覗き見ることができるわけである。

#### 〔註〕

\*この論稿は、ピーター・コース他著『言語の思想圏』（拙訳、平凡社）の解説「観念史学としての言語学史」のフランス構造主義に関する部分を削除して、加筆・再編し

たものである。

- 1) このことは、以下のチョムスキーの有名な発言にはっきりと見てとれる。“Linguistic theory is concerned primarily with an ideal speaker-hearer, in a completely homogeneous speech-community, who knows its language perfectly and is unaffected by such grammatically irrelevant conditions as memory limitations, distractions, shifts of attention and interest, and errors (random or characteristic) in applying his knowledge of the language in actual performance.” (Noam Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, 1965).
- 2) Irene Lawrence, *Linguistics and Theology: The Significance of Noam Chomsky for Theological Construction* (Scarecrow Press, 1980) というあからさまなタイトルで、生成文法と神学との関連を論じた書物もある。
- 3) Edward Matthei and Thomas Roeper, *Understanding and producing Speech* (Fontana Paperbacks, 1983) を参照。
- 4) この傾向は、とりわけ1950・60年代のアメリカ合衆国において、機械翻訳という国家的プロジェクトとして顕在化する。しかしながら、言語理解の仕組みについての現実的かつ包括的な理解が不十分であったためと、それを技術的に実現させるハードウェアの性能に問題があったため、その結果はその後の歴史が明らかにしているように惨憺たるものであった。この失敗も80年代に入り、言語理解についての総合的な（統語論のみならず、意味、談話の構造、常識、世界観なども含み入れた）理論構築の組織化が進展する中で、またコンピュータや先端科学の発達のおかげで、再び巨大プロジェクトの装いをまとって、徐々に挽回できそうな見通しが開けつつある。
- 5) Noam Chomsky, *Cartesian Linguistics: A Chapter in the History of Rationalist Thought* (Harper and Row, 1966) (『デカルト派 言語学』, 川本茂雄訳, みすず書房)。
- 6) Stephen Land, *From Signs to Propositions: The Concepts in Eighteenth-Century Semantic Theory* (Longman, 1974) を参照。
- 7) Michael A. Covington, “Grammatical Theory in the Middle Ages,” in Theodora Bynon and F. R. Palmer, eds., *Studies in the History of Western Linguistics* (Cambridge Univ. Press, 1986)。
- 8) Herbert E. Brekle, “The Seventeenth Century,” in Thomas A. Sebeok, ed., *Current Trends in Linguistics Vol. 13: Historiography of Linguistics* (Mouton, 1975)。
- 9) Noam Chomsky, “A Review of B. F. Skinner’s *Verbal Behavior*” in J. A. Fodor and J. J. Katz, eds., *The Structure of Language: Readings in the Philosophy of Language* (Englewood Cliff, 1964, Original Work Published in *Language* 35, 1959: 26—58) 及び M. Piattelli-palmarini, *Language and Learning* (Harvard Univ. Press, 1980) (『ことばの理論, 学習の理論, 上・下』藤野邦夫訳・思索社) を参照。



- 10) 但し、チョムスキーのいう主体は、文生成装置という自律的な単位としての主体である。ちなみにアメリカ構造言語学における主体の不在は、フランス構造主義とは大きく異なって積極的なものではなく、単に素朴な科学的客観主義からの結末であるにすぎない。
- 11) Frederick J. Newmeyer, *Linguistic Theory in America: The First Quarter-Century of Transformational Grammar* (Academic Press, 1980) 及び Howard Gardner, *The Mind's New Science: A History of the Cognitive Revolution* (Basic Books, 1985) (『認知革命——知の科学の誕生と展開』佐伯・海保＝監訳、産業図書)を参照。
- 12) Noam Chomsky, *Lectures on Government and Binding* (Foris Publications, 1981) (『統率・束縛理論』安井稔・原口庄輔訳、研究社)を参照。
- 13) 註7の Covington 参照。ちなみに、チョムスキーの最新の理論においても、言語能力と個別言語の文法範疇との実在論的な一致は、ますます確認が難しくなっており、理論構成の実在性は、有体に言って、われわれの信念に委ねられる性格のものとなるのであろうが、様態論者らの破綻と同様、それが唯名論的自壊のサイクルにつながる可能性は十分にあると言える。
- 14) Alfred North Whitehead, *Science and the Modern World* (Cambridge Univ. Press, 1929) (『科学と近代世界』上田泰治・村上至孝訳、松籟社)を参照。
- 15) フランシス・ベーコンは、興味深いことに、代表的な実験哲学者らしく、自らの哲学文法の一部門として「音韻論」を研究すべきことを説いている。註8の Brekle を参照。
- 16) Hans Aarsleff, *From Locke to Saussure: Essays on the Study of Language and Intellectual History* (University of Minnesota Press, 1983), M. M. Slaughter, *Universal Languages and Scientific Taxonomy in the Seventeenth Century* (Cambridge Univ. Press 1982).
- 17) イギリス経験論における言語思想の展開については、Stephen Land, *The Philosophy of Language in Britain* (AMS Press, 1986) が非常に刺激的で有益である。特にジョージ・バークリーの観念哲学を、今世紀の構造主義との関連で論じている第3章は、大変に興味深い。
- 18) 註16の Slaughter を参照。
- 19) Roger G. van de Velde, "The Concept of 'Scientific' in the Development of the Language Sciences," in K. Kerner, ed., *Progress in Linguistic Historiography* (Amsterdam-John Benjamins B. V., 1980).
- 20) その上にユニウスは、ゴート語の福音書「羊皮銀泥書」(Silver Codex)を、古英語福音書 (Anglo-Saxon Gospels) のテキストとともに出版し、イギリス文献学草創期の代表的人物、ジョージ・ヒックスに影響を与えている。Leonard Bloomfield, *Language* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1933) (『言語』三宅鴻・日野資純訳、大修館書店)を参照。

- 21) 註19の van de Velde を参照。
- 22) Charles F. Hockett, *A Course in Modern Linguistics* (Macmillan Publishing Co., Inc., 1958) を参照。
- 23) 厳密には、1816年に出版されたフランツ・ボップの『サンスクリット動詞活用体系』(Conjugationssystem der Sanskritsprache) をその出発点と考える者も多い。
- 24) E. F. Kerner, *Toward a Historiography of Linguistics: Selected Essays* (Amsterdam-John Benjamins B. V., 1987)。
- 25) Thomas S. Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions* (Chicago Univ. Press, 1962, 1971) 『科学革命の構造』中山茂訳、みすず書房) を参照。
- 26) 詳しい議論は、Frederick J. Newmeyer, “Has There Been Chomskyan Revolution’ in Linguistics?” in *Language* 62: 1, 1—18 (「チョムスキーは言語学に革命をもたらしたか」『言語』昭和61年12月号) を参照。
- 27) R. H. Robins, *A Short History of Linguistics* (Bloomington and London, 1967), G. Mounin, *Histoire de la linguistique des origines au XX<sup>e</sup> siècle* (Paris, 1967) (『二十世紀の言語学』佐藤信夫訳、白水社), Thomas Sebeok, ed., *Portraits of Linguists: A Bibliographical Source Book for the History of Western Linguistics 1746—1963* (Bloomington: Indiana University Press), idem, ed., *Historiography of Linguistics*, 2 vols (Mouton, 1975), Dell Hymes, ed., *Studies in the History of Linguistics: Tradition and Paradigms* (Indiana Univ. Press, 1974)。
- 28) R. H. Robins, “Forword” より。註24の Kerner に寄せたもの。
- 29) 註24の Kerner を参照。